

CAMPUS 八戸学院

vol.50

八戸学院大学短期大学部
介護福祉学科 2019年4月開設

第100回全国高等学校野球選手権記念大会
夏の甲子園 9回目の出場

共同研究
運動教室参加高齢者の季節における
身体活動と体組成・体力の変化



福祉のスペシャリストを育成

2019年4月開設 八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科【2年課程】

【取得学位】短期大学士(介護福祉学)

【受験資格】介護福祉士国家試験受験資格

【資格取得】社会福祉主事任用資格

専門知識を習得し社会で活躍する人材となる

高等教育機関の多様な機能や教育・研究から介護を学び
リーダーとなり得る人材の育成を目指す

大学3年次に編入学が可能

学びを深めるため大学3年生への編入学を推奨
八戸学院大学で経営やITなど多彩な分野の知識やスキルを習得し
福祉施設の経営者を目指すことも可能

CONTENTS

- 3 八戸学院大学短期大学部
介護福祉学科 2019年4月開設
- 4 第100回全国高等学校野球選手権記念大会
夏の甲子園 9回目の出場
- 6 共同研究
運動教室参加高齢者の季節における
身体活動と体組織・体力の変化
- 8 八戸学院 CLOSE UP!
おもしろくなければ野西じゃない
- 10 八戸学院 TOPICS
- 12 ステラが行く
- 14 オーストラリア教育の移り変わり 世代間で大きな差
- 16 資格取得講座を含めた防災教育による
地域活性化の研究
- 17 図書空間
【アナシスタ文庫】より【国境なき医師団へ】寄付
- 18 理事長散策

CAMPUS 八戸学院

vol.50



表紙

美保野キャンパス学生食堂
昼食時は大学、短大部、専攻科の学生、
教職員で賑わいます。

建学の精神 「神を敬し、人を愛する」

カトリックの精神に則る道徳教育を施し、高尚なる人格の完成を期し、現代社会が要請する有為の人材を育成することをもって目的とする。(寄附行為 第3条)

- 八戸学院大学
TEL 0178-25-2711
- 八戸学院大学短期大学部
TEL 0178-25-4411
- 八戸学院地域連携研究センター
TEL 0178-25-2789
- 八戸学院図書館
TEL 0178-30-1695
- 八戸学院光星高等学校
TEL 0178-33-4151
- 八戸学院光星高等学校専攻科
TEL 0178-25-6322
- 八戸学院野辺地西高等学校
TEL 0175-64-4166
- 八戸学院幼稚園
TEL 0178-34-5765
- 八戸学院聖アンナ幼稚園
TEL 0178-45-3670
- 八戸学院第二ののめ幼稚園
TEL 0178-25-2488

<http://kosei.hachinohe-u.ac.jp/>



美保野キャンパスの散策にやってきた第二ののめ幼稚園の園児を理事長がお出迎え。すると、園児のみなさんから素敵なプレゼントをいただきました。

法人事務局では、可愛らしい作品がお客様をお出迎えしています。



第100回全国高等学校野球選手権記念大会 夏の甲子園 9回目の出場

グラウンドの選手をはじめ、ベンチで、スタンドで様々な形で100回という節目の大会を体験しました。それぞれの甲子園を紹介します。



「100回目の甲子園」

吹奏楽部長 福士 湧太

県大会決勝のあの日、うだるような暑さの中、私達は一つの思いを胸にスタンドで応援していた。「100回目の甲子園に！」昨年の雪辱を果たし、記念すべき100回目大会に駒を進めてほしい。その思いで一生懸命応援を送った。そして、最後のアウトをとった時、鳥肌が立った。同時に硬式野球部に対して感謝の気持ちで一杯になった。100回目の甲子園球場は、連日超満員で、対戦相手は地元高校が続いた。少しでも硬式野球部の力になればという思いで、私は必死にスネアドラムを叩いた。マメが出来ては潰れ、太鼓のヘッドも破れてしまった。それでも試合終了後は爽やかな気持ちで一杯だった。ひたむきに白球を追う硬式野球部、心を合わせて応援するスタンド、チーム光星の団結力を感じた。来年こそ真紅の大優勝旗を東北に持ち帰ってきてほしい。その為に来年も爽やか光星を貫き、チーム光星一丸となって頑張りたい。

「大舞台で」

チアリーダー部長 岩間 佳乃

100回目となる記念すべき大会への出場を果たした硬式野球部を応援するために、今回チアリーダー部として甲子園に行くことができました。県大会の会場とは違って甲子園球場はとて大きく、大勢の観客の熱い応援や会場の雰囲気は圧迫されました。応援の曲が去年と6曲変わり、新たな振り付けを考え覚えることが大変でした。本番はとて緊張しましたが、全校生徒と観客の皆さんで三塁側アルプスを盛り上げることができ、とても楽しかったです。私たちが甲子園に行けたのは、主役である硬式野球部の頑張りや、先生方をはじめ大勢の方々の支えがあったからこそです。

第100回という記念すべき節目の年に、あの大きな夢の舞台で応援するということも貴重な経験をする事ができ、嬉しかったです。硬式野球部には、来年の101回目の甲子園出場と、優勝旗を持って帰って来ることを期待し、今後も応援し続けたいと思います。



「野球の素晴らしさ再確認」

硬式野球部主将 長南 佳洋

今大会を振り返ると、やはり悔しい一言です。自分たちは勝たなければならぬ理由が沢山あり、今までは違う特別な思いがありました。3季連続で甲子園大会を逃していること、一昨年の東邦高校戦の雪辱を晴らすこと、龍谷大平安高校へリベンジすること、など様々な思いがありました。その中でも一番は、初戦の直前に息を引き取った後輩のためでした。直接看取ることは叶いませんでしたが、「あいつに少しでも良い報告をしよう」とチーム一丸で戦いました。結果はリベンジも果たせず、2回戦で大敗しましたが、天国から自分達を応援してくれ、力以上のものを出し切れたと思っています。そして私自身この100回大会に出場できた奇跡と様々な経験、そして何よりも自分自身が沢山の事を考えさせられ野球の素晴らしさに改めて気づかされた大会でした。今回も優勝旗は持ち帰ることはできませんでしたが、今後、後輩達が必要とされることを信じて、今後も大好きな野球に携わっていききたいと思っています。

「夢が叶った甲子園」

硬式野球部マネージャー 斉藤 桜子

7月30日に、甲子園へ向けて出発しました。新幹線から降りた瞬間の暑さに驚き、暑さになれるのはとても時間がかかりました。抽選で光星の初戦は最終日と決まり、その日までドキドキしていました。初戦は地元の兵庫県代表、明石商業高校でした。接戦になりましたがなんとか勝ち、1回戦突破しました。2回戦目は龍谷大平安高校と戦いました。私が記録員ということもあり、前の日からとても緊張していました。でも、高校入学時から甲子園でスコアを書くという夢が叶い本当に嬉しかったです。結果は負けてしまいましたが、最後まで選手が楽しそうにプレーしている姿を近くで見えて、一緒に戦うことができ最高の夏になりました。負けた時は最後だという実感がわきませんでした。帰って来る途中に引退するのだと思えば、悲しい気持ちになりました。3年間の最後の夏に100回大会の甲子園に出場できて高校最後の夏休みは本当に忘れられない思い出になりました。

祝「高校野球秋季東北大会」優勝

明治神宮大会出場へ

「高校野球秋季東北大会」において、5年ぶり5度目の優勝を飾り、11月9日開幕の「明治神宮大会」の出場が決定しました。



デーリー東北新聞社提供 【10/19朝刊掲載】

「新たな歴史を」

硬式野球部監督 仲井 宗基

2年ぶり9回目の出場になる今大会は、本校にとりましては、夏春通じて18回目の甲子園出場でしたが、第100回の節目の大会でしたので、出場が決まった時は過去の出場の時よりも大きな喜びを感じました。

もう一度3季連続で準優勝をしたチームのような『猛打・強打の光星』の復活を合言葉に甲子園を沸かせる試合をしたいと大会に挑みました。また、一昨年の甲子園での東邦高校戦で味わった屈辱を何とか晴らしたいとチーム一丸で初戦の地元兵庫県代表の明石商業高校と戦い、延長の激戦になりましたが、選手達の頑張りとお声援の力でスタンドから届く本校生徒の熱い声援の力で勝利することができました。2回戦の龍谷大平安高校との試合は、伝統校の力を見せつけられることとなり、敗れましたが、第100回の記念すべき大会で八戸学院の新たな歴史を刻むことができ、誇りに感じています。

様々な方に支えられ日々の硬式野球部の活動があることを忘れず、今後も精進し全国制覇を目指し新たな歴史を刻んでいきたいと思っています。

運動教室参加高齢者の季節における
身体活動量と体組織・体力の変化

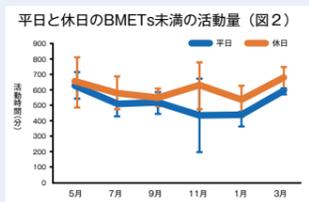
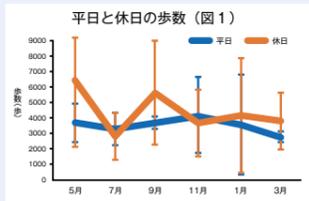
現在国内において65歳以上の高齢者の人口が全人口に占める割合は27・7%となり、超高齢化社会を迎えている。厚生労働省によると、今後も高齢化率は上昇し、2036年には33・3%になると推定されている(平成30年高齢社会白書)。地方においては、高齢化率はより深刻で、青森県においては31%を超えている。また、青森県の県南地域にある南部町は2017年10月現在の人口は17594名であるが、その内65歳以上の人口の占める割合は37・7%であり(平成29年青森県の人口)、3人に1人が高齢者となっている。これは、厚生労働省が推測する2050年の日本の高齢化率に相当する。

高齢者の生活の質を保持するためには、生活習慣病の予防だけでなく、運動機能を維持する事も重要である。平成28年国民生活基礎調査によると介護が必要となった主な原因を要介護度別にみると要支援者では関節疾患と骨折・転倒は1位、3位であり、合わせて32・4%を占める。また要介護では関節疾患と骨折・転倒は6位、4位であり、合わせて17・8%を占めている。そのため、転倒や骨折の予防のために加齢に伴う筋の委縮や骨密度の減少を防ぎ、歩行機能を維持することが必要である。

6 METs 以上の活動時間を求め、季節間で比較した。今回おこなった調査の結果、5月、7月、9月、11月、1月、3月といった季節の変化に伴う身長、体重、体脂肪率、筋肉量、骨密度の変化は認められなかった(表1)ことから本調査対象者の体格は維持されていたのではないかと考えられる。

表1 身体組織、体力・運動能力の変化 (n=3)

項目	5月	7月	9月	11月	1月	3月
身長	154.5 ± 8.2	155.1 ± 8.1	154.4 ± 8.2	155.0 ± 7.4	154.6 ± 8.1	154.6 ± 8.0
体重	46.5 ± 4.0	46.2 ± 4.6	45.4 ± 5.3	46.4 ± 5.7	46.6 ± 5.0	46.7 ± 4.2
体脂肪率	24.8 ± 6.9	22.8 ± 7.3	23.0 ± 8.7	24.3 ± 9.1	24.2 ± 8.3	22.9 ± 9.1
筋肉量	32.8 ± 0.7	33.4 ± 0.6	32.7 ± 0.7	32.8 ± 0.3	33.0 ± 0.7	33.7 ± 1.7
骨密度	87.0 ± 11.3	80.4 ± 10.5	84.6 ± 10.6	87.7 ± 9.7	82.7 ± 10.3	83.7 ± 10.9
握力	26.2 ± 3.2	26.3 ± 3.7	24.4 ± 3.2	25.3 ± 3.0	25.8 ± 2.9	24.3 ± 2.1
椅子立上り速度	0.63 ± 0.07	0.78 ± 0.05	0.75 ± 0.07	0.65 ± 0.06	0.64 ± 0.04	0.65 ± 0.04
膝伸展筋力	13.7 ± 5.9	15.7 ± 3.1	12.3 ± 7.0	15.0 ± 8.2	15.1 ± 6.9	14.7 ± 6.2
開眼片足立ち	92.7 ± 38.7	92.3 ± 22.9	89.3 ± 43.4	91.0 ± 21.9	92.7 ± 38.7	85.3 ± 49.0
ファンクショナルリーチ	27.3 ± 0.9	31.5 ± 2.5	27.0 ± 2.8	29.0 ± 2.9	24.3 ± 2.9	27.5 ± 2.0
10m全力歩行	4.5 ± 0.6	4.0 ± 0.4	4.3 ± 0.5	4.6 ± 0.5	4.8 ± 0.1	4.6 ± 0.2

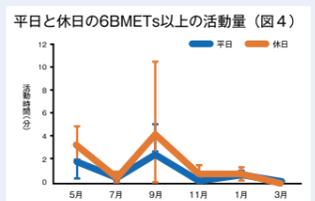
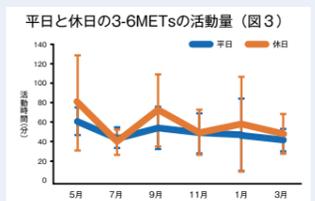


近年高齢者の健康寿命延伸のために各地で介護予防のための運動教室が行われており、様々な取り組みがされている。加藤ら(2013)は二次予防事業対象者に対する運動器機能向上プログラムの介入効果の検証を、滝本ら(2009)は地域に根ざした高齢者運動教室の効果を検証するために理学療法士、理学療法学生、地域スポーツクラブなどの地域における人材資源を利用した介護予防事業を行っている。我々は2013年より青森県南部町社会福祉課にて実施されている介護予防のための運動教室にて運動教室参加者を対象に学生とともに体力・運動能力の調査をおこなってきた。調査開始当初は3地区(南部地区、名川地区、福地地区)で開催される運動教室に、参加者は1つの地区にしか参加できなかったが、体力・運動能力の保持・増進には継続して運動を行う必要性があることから、2016年度より参加者が3地区にておこなわれる運動教室すべてに参加できるようになった。そこで我々は季節変化が高齢者の体組成と体力・運動能力にどのような影響を与えるか明らかにすることで、介護予防のための新たな運動プログラム作成のための基礎資料とすること、また、体力の保持・増進には運動教室での活動だけでは

Lexellら(1988)によると筋肉量は20歳から80歳の間で40%減少し、50歳までは10%減少する。その後筋肉量の減少は加速すると報告されている。この報告によると50歳から80歳の間で30%筋肉量が減少することになり、年間平均1%減少することとなる。しかしながら本調査では5月と3月の筋肉量を平均で比べると0.9kg増加していたため、筋肉量は維持されていたことが分かる。

身体活動量においては、平日の歩数(図1)は約27000~41000歩、休日は28000~63000歩で推移したが季節間での変化はなかった。3 METs未滿での活動時間(図2)は、平日は420~610分、休日は510~660分で推移した。3 METs以上6 METs未滿での活動時間(図3)においては、平日は42~62分、休日は42~73分で推移したが、6 METs以上での活動時間(図4)は平日、休日とも5月と9月で数分見られても、他の月では活動時間が1分に満たなかった。また、身体活動量は5月、7月、9月、11月、1月、3月と季節が変化しても平日、休日の歩数、3 METs未滿での活動時間、

なく、日常生活における身体活動量の確保が重要となるため、季節における身体活動量の変化を明らかにすることで、高齢者の行動変容を促すことが可能となり、健康寿命の延伸に寄与することができるとはいかと思え学生とともに調査をおこなった。対象は2017年度に南部地区(5月~7月)、福地地区(9月~11月)、名川地区(1月~3月)にておこなわれた介護予防のための運動教室への参加者で、3地区すべてに参加を希望した15名のうち5月、7月、9月11月、1月、3月に行われた身体組成、体力・運動能力の測定に参加した女性3名とした。2017年5月時点の年齢は69・1±1・6歳であった。



測定内容は身体組成と体力・運動能力、身体活動量の測定を行った。身体組成の測定はマルチ周波数体組成計(TANITA社製MC190)を使用し、体重、BMI、体脂肪率、筋肉量を求めた。測定時においては、高齢者が対象となるため、身体にペースメーカーを埋め込んでいないか事前に確認したうえで測定を行った。骨密度の測定においては超音波式骨密度計(GE Medical System, Lunar Achilles A-1000)を使用し、若年成人平均値に対する割合を求めた。体力・運動能力の測定

身体活動量の測定を行った。身体組成の測定はマルチ周波数体組成計(TANITA社製MC190)を使用し、体重、BMI、体脂肪率、筋肉量を求めた。測定時においては、高齢者が対象となるため、身体にペースメーカーを埋め込んでいないか事前に確認したうえで測定を行った。骨密度の測定においては超音波式骨密度計(GE Medical System, Lunar Achilles A-1000)を使用し、若年成人平均値に対する割合を求めた。体力・運動能力の測定

6 METs以上9 METs未滿での活動時間、9 METs以上での活動時間に差は認められなかった。積雪地においては、積雪期は非積雪期よりも歩数が減少する(須田1995)ことが報告されており、岡山らは(2004)降雪地域に居住する高齢者の身体活動量および食事摂取の季節変動について東北農村部で実施された高齢者向け健康づくり事業への参加者を対象に調査をおこなったところ、冬期になると体重の増加を示し、活動量は夏期と比較して顕著に減少することを報告している。一方で、運動習慣のある者は、積雪や降雪といった季節や天候の影響を受けにくく、積雪期でも運動量および歩数が確保される、降雪は運動量および歩数にあまり影響しない(工藤ら2004)という報告もある。本調査における対象者は継続して定期的に運動教室へ参加している者であったため、身体活動量は季節の影響を受けなかった可能性がある。

雪地带に居住する高齢者の身体活動量および食事摂取の季節変動について東北農村部で実施された高齢者向け健康づくり事業への参加者を対象に調査をおこなったところ、

これらのことから、通年で介護予防のための運動教室に参加している高齢者は季節に関係なく一定の活動量を有し、体型・体力を保持している可能性がある。今後は対象者数を増やとともに、日常生活の内容を明らかにしていきたい。本調査の一部は平成29年度学校法人光星学院イノベーションプログラム(基金) 研究等補助金により行われた。

【参考文献】
加藤智香子 他、二次予防事業対象者に対する運動器機能向上プログラムの参加者特性と介入効果の検証、日本老年医学会雑誌、50(6):804-811、2013 滝本幸治他、地域に根ざした高齢者運動教室の効果検証—総合体力評価と効果要因の検討を踏まえて—、理学療法科学 24(2):281-285、2009 Lexell J 他、What is the cause of aging atrophy? J Neurol Sci 84: 275-294、1988. 須田a、積雪地における高齢者の生活の身体活動(1):非積雪期と積雪期の身体活動水準、北海道大学教育学部紀要、66_P1-13、1995 岡山寧子 他、東北農村部における高齢者の身体活動及び食事摂取の季節変動、日生氣誌、41(3):77-85、2004 工藤奈織美 他、青森市における運動量確保に関する研究—非積雪期と積雪期の比較から—青森保健大雑誌 6(2), 1-8, 2004



渡邊 陵由
八戸学院大学
健康医療学部 准教授



工藤 祐太郎
八戸学院大学
健康医療学部 講師

は10m全力歩行、握力、膝伸展筋力、椅子立上り速度、開眼片足立ち、ファンクショナルリーチの測定を行った。10m全力歩行においては、光電管を使用し、測定区間10mの前後に助走区間を2mとり、スタートの後の加速、ゴール時の減速の影響を取り除いた。握力、開眼片足立ちについては文部科学省新体力テストの手順に則って測定をおこなった。膝伸展筋力の測定についてはハンドヘルドダイナモメーター(アニマ社製μForce)を使用し、参加者に椅子に座ってもらい、膝を90度にした状態で足首をベルトで固定し、等尺性膝伸展筋力を測定した。椅子立上り速度の測定にはリニアポジシヨントランスデューサー(Kinetic Performance社製GymAware)を使用し測定をおこなった。ファンクショナルリーチについては立位姿勢から肩の高さに上肢を前方挙げした状態から、挙げした上肢をなるべく水平前方に移動させ、指先の移動距離を測定した。身体活動量については3軸加速度計(オムロン社製EPA750c)を使用し、参加者に入浴時、睡眠時を除いた7日間腰部に装着し生活していただけ計測した。身体活動量は平日、休日に分けて歩数、3 METs未滿での活動時間、3 METs以上6 METs未滿での活動時間、

測定内容は身体組成と体力・運動能力、身体活動量の測定を行った。身体組成の測定はマルチ周波数体組成計(TANITA社製MC190)を使用し、体重、BMI、体脂肪率、筋肉量を求めた。測定時においては、高齢者が対象となるため、身体にペースメーカーを埋め込んでいないか事前に確認したうえで測定を行った。骨密度の測定においては超音波式骨密度計(GE Medical System, Lunar Achilles A-1000)を使用し、若年成人平均値に対する割合を求めた。体力・運動能力の測定

は10m全力歩行、握力、膝伸展筋力、椅子立上り速度、開眼片足立ち、ファンクショナルリーチの測定を行った。10m全力歩行においては、光電管を使用し、測定区間10mの前後に助走区間を2mとり、スタートの後の加速、ゴール時の減速の影響を取り除いた。握力、開眼片足立ちについては文部科学省新体力テストの手順に則って測定をおこなった。膝伸展筋力の測定についてはハンドヘルドダイナモメーター(アニマ社製μForce)を使用し、参加者に椅子に座ってもらい、膝を90度にした状態で足首をベルトで固定し、等尺性膝伸展筋力を測定した。椅子立上り速度の測定にはリニアポジシヨントランスデューサー(Kinetic Performance社製GymAware)を使用し測定をおこなった。ファンクショナルリーチについては立位姿勢から肩の高さに上肢を前方挙げした状態から、挙げした上肢をなるべく水平前方に移動させ、指先の移動距離を測定した。身体活動量については3軸加速度計(オムロン社製EPA750c)を使用し、参加者に入浴時、睡眠時を除いた7日間腰部に装着し生活していただけ計測した。身体活動量は平日、休日に分けて歩数、3 METs未滿での活動時間、3 METs以上6 METs未滿での活動時間、

八戸学院野辺地西高等学校

おもしろくなければ野西じゃない



自分探し

野辺地西高校

校長 橋場 保人

八戸学院野辺地西高等学校は、下北、上十三、東青の三つの地域に隣接するところに位置しており、また広く青森市、弘前市、八戸市など県内三市からもたくさんの方が入学し、常に時代が求める人材育成に力を注いで参りました。現在は、教養進学系、保育福祉系、産業技術系の三系列からなる「青森県唯一の私立総合学科高校」として存在しています。総合学科高校は、将来の「自分探しのため」の学校とも言われており、本校では草木豊かな自然環境の中で、生徒が自分の個性や適性を発見し、将来の進路や生き方を学び、挑戦と失敗を繰り返しながら、柔軟に逞しく生きる力身につけます。「面白くなければ野西じゃない!」全校生徒、全教職員がこの合い言葉のもとに面白いことを常に模索しながら、日々学校生活を送っています。特に、現在は、優れた

競技実績、指導実績を誇る指導陣によるスポーツ教育の実践(三十一年度、スポーツ進学系列始動)、さらに少子化に対応すべく個別指導重視のカリキュラム編成が可能な「総合学科」体制の充実(十一月、全国総合学科教育研究大会において熱気球クラブによる岩手県山田町への高校生被災地復興支援事業活動の発表)、そして本法人の大学、短期大学部との高大連携による五年、七年間の質の高い一貫教育の実践を掲げ、地域に愛され、地域とともに成長できる学校を目指しております。

CLOSE UP!

オンラインで English

教育改革に対応すべく世界に羽ばたける人材育成のためのグローバル教育の実践としてフィリピンの語学学校「CNE1」とのオンラインビデオ通話システムを活用したマンツーマンの英会話授業を行っています。



オンラインの英会話授業を行う 池嶺那さん

目標達成に向けて

野辺地西高校

1年 池 嶺那

私は総合学科、進学系列で学んでいます。HRが始まる前の朝学習や、フィリピンの先生とオンライン英会話レッスンをはじめるなど、とても学習面が充実しています。わからない所は先生に聞けば教えてくれるので、しっかりと勉強ができています。

私は、将来助産師になるために、国立大学に入りたいと考えています。先生方は大学に入れるように指導してくださるので、私もしっかりと頑張ろうと思っています。

野辺地西高校には「面白くなければ野西じゃない」というスローガンがあることが魅力だと思っています。学校生活をどういうものにするかは自分次第なので、勉強をしっかりとし、毎日楽しく過ごし、充実した高校生活を送りたいと思います。

全校生徒で出陣のへじ 祇園祭り



藩政時代に北前船により京都から伝えられた「祇園祭り」

野辺地西高校では、平成13年に「のへじ祇園祭り」に初めて参加し、今年で19回目の参加となりました。参加当初は、生徒と職員の間で共同作業による悪戦苦闘の山車の製作や、野辺地祇園囃子の演奏のために、祇園囃子保存会からの講習会を開催し、さらに、「祇園囃子保存部」も創部して参加にこぎつけました。しかし、近年の少子化の影響などにより「のへじ祇園祭り」の活気が失われつつあり、野辺地町に存在する高校として、日頃の学習の成果と生徒の元気な姿を皆様に盛りだくこと地元の祭りを盛り上げたい、地域皆様とともに「新たな町の歴史づくり」に貢献したい、という思いから学校行事で全校生徒が参加することにしました。運行を無事に終え、祭実行委員長の旗谷先生は「毎回準備に時間をかけ当日は更に安全第一を心がけて慎重に運営しています。慣れが一番怖い。無事に運行できることが何よ

り大事です。今後も生徒が安全に、そして積極的に参加できる環境作りを目指していきたい。」 これからも、一層地域の皆様に愛される学校を目指したいと思っています。



ストウ写真館提供



東奥日報社提供

たくさんの仲間と共に 僕は小学生の頃から、「のへじ祇園まつり」に参加しています。今年が高校生として最後の参加でしたが、今まで以上に盛り上がり、楽しむことができました。昨年までは希望する生徒のみが参加していましたが、今年が初の全校参加の学校行事となりました。天候に恵まれ、多くの生徒が参加することができ、とても喜ばしく思います。初参加の生徒も、地元の生徒に合わせて掛け声をかけたりと、私たちにとってとても良い刺激になったと思います。また、今年も多くの方がお囃子を覚え、積極的に参加してくれたので、ぜひ来年も学校全体で盛り上げ、まつりの楽しさを継承して行ってほしいと思います。



野辺地西高校 3年 天内 颯保

大学 上越教育大学・八戸学院大学 教員養成の高度化を目指し協定締結 [8/31]



川崎直哉上越教育大学学長（左）

八戸学院大学と上越教育大学（新潟県上越市）間において教員養成などに関する協定締結が行われました。

現在、八戸学院大学では、高校教諭（商業、情報）、中学・高校教諭（保健体育）、養護教諭が取得できますが、上越教育大学大学院で所定の課程を修了すると小学校教諭などの教員免許も取得することが可能になります。

締結式で川崎直哉学長は「連携を活用していただき、教育現場で活躍していただきたい」と挨拶され、法官学長は「教員を目指す学生にとって高度な学びの場が増えることを期待している」と述べました。

大学 女子バスケットボール部二部リーグ優勝



第19回東北大学バスケットボールリーグ二部トーナメントが9月22日～23日に開催されました。男子が第3位、女子が優勝という結果になりました。女子は、その後一部・二部入替戦に出場しましたが惜しくも岩手大学に負けてしまいました。昇格はなりませんでしたが、昇格はなりませんでしたが、来年の昇格を4年生に誓っていました。

近年バスケットボール部は、男女ともに部員数も多くなり、地元企業と連携したバスケットボールクリニックの開催や様々な交流試合を行っています。青森県のバスケットボール普及のためにも今後も様々な活動を行っていきまので、応援よろしくお願いたします。

大学 福井国体 女子ラグビー青森チーム7位入賞 青森チームに姉妹で出場



笑顔で青森ポーズ 光莉さん（左） 佳寿音さん（右）

「福井しあわせ元気国体2018」の女子ラグビーに青森県が初出場。八学大、光星高校から7名が出場し、7位入賞を果たしました。鈴木佳寿音さん（八学大2年）、光莉さん（光星高2年）は姉妹で出場。八学大女子ラグビー部で活動している佳寿音さんは、「フィジカル面や戦術など全国の層の厚さを実感しました。今回の試合を通して、自分が目指すべきことが見えました。」佳寿音さんの影響もあり高校からラグビーを始めたという光莉さんは「姉妹揃って同じ大会に出場する機会はほとんどなく、貴重な経験になりました。青森チームの良さを出せたと思います。」と感想を述べました。今回の経験を糧にさらなる活躍を誓いました。

大学 タオル帽子寄贈 [9/14]



デーリー東北新聞社提供【9/19朝刊掲載】

健康医療学部看護学科のサークル「アースワールド」が十和田市立中央病院にタオル帽子70枚を寄贈しました。タオル帽子は、1枚のフェイスタオルからできる帽子で、抗がん剤治療で脱毛した患者さんや高齢者の方に利用されています。「アースワールド」では、平成22年からこの活動を開始し、これまで様々な病院や施設にタオル帽子を寄贈してきました。

今回の寄贈は、十和田市立中央病院ではがんによる苦痛を和らげる緩和ケアを推進していることや、学生の実習を受け入れていることから実現。「患者さんのために使ってください」と部長の工藤柚美香さんから手渡されました。

光星高 櫛引八幡宮清掃奉仕 地域貢献と地元の歴史を学ぶ [9/12]

光星高校工業技術科の生徒45名が櫛引八幡宮の清掃奉仕を行いました。

今回の清掃奉仕は、櫛引八幡宮秋例大祭に向けたもので、拝殿の清掃や特設ステージの設営、ちようちんの取り付けなどを行いました。櫛引八幡宮敬神会では「例年は、準備に丸1日かかるが、生徒さんが積極的に作業に取り組んでくれたおかげで早く終わりました。」と喜んでいただきました。

清掃奉仕終了後、櫛引八幡宮の歴史について説明を受け、その後、慰労会が行われました。

慰労会では、櫛引八幡宮敬神会会長の松田一氏より「私が光星高校OBという繋がりから実現にいたしました。本日の経験が勉学や部活動に役立てば嬉しいです。」と挨拶があり、感謝状が贈呈されました。

生徒代表の吉田太陽くんは「清掃奉仕を終え、心が清められたと思います。本日参加した生徒全員「熱意は人を動か



し、社会を動かす」のテーマを胸に清掃奉仕を行いました。今日の経験をこからの活動に役立てたいです」と挨拶しました。

光星高 光星高校 八学大 八学大短大部 高大連携修了式 [9/25]



「総合的な学習の時間」を利用し4月より八学大および八学大短大部の講義（計15回）を大学生と一緒に受講、試験を経て単位を取得した生徒18名に対し、修了書が授与されました。

閉校式では、地域経営学部の大沢泉学部長より「専門的な知識に触れる良い機会になったと思います。キャリアアップに繋がってください」と挨拶しました。

受講した生徒を代表して堀合遥希さんが「進学への思いが強くなりました。将来を見据えて頑張ります」と決意を語りました。

取得した単位は、同大学および短大部に進学した際にすでに取得した単位として認められます。

専攻科 通学路をキレイに クリーンパートナー開催 [9/21]



学生会主催によるクリーンパートナーが開催されました。

日頃通学に利用している道路の清掃奉仕活動を行い、今回で9回目となります。

この清掃活動は範囲が広いので、昨年と同様2ルートに分かれて行いました。第1ルートは国道45号線の美保野口付近から出発、第2ルートは第一養護学校付近から出発、それぞれ本校まで約4kmの道のりを清掃しました。

今回の清掃活動では可燃ゴミ20kg、不燃ゴミ20kgを回収しました。

八戸学院聖アンナ幼稚園

たいよう先生の運動あそび

今年度から川口太陽先生をお迎えし、『たいよう先生の運動遊び』を開始しました。年長児と年中児が参加し、毎回「今日はどんなことをするんだろう!？」と目を輝かせています。音楽に合わせたウォーミングアップから始まり、マット運動や色のカードを見て動く遊びなどをし、脳と体をたくさん動かした子ども達はとっても満足そうな顔をしています。太陽先生の明るい笑顔と、リズムに合わせて体を動かす楽しい時間。次回もとても楽しみです!



ステラ・フォーカス



八戸学院第二しののめ幼稚園

ボディペインティング

園庭に段ボールを繋ぎ合わせた大きなキャンバスを広げ、絵の具と筆を準備しボディペインティングが始まりました。裸足になった園児たちが一斉に走り出し、手に絵の具をたっぷりつけて、何も描かれていないキャンバスに少しためらいながらも手形を押していました。友達同士で背中や腕に手形を付け合い、絵の具で染まった体を見て笑い合ったり、足に絵の具を塗ってキャンバスの上を踊る様に走ったりと、思い思いの表現の仕方

で楽しむことが出来ました。造形活動を通して子どもたちは、全身を使って表現する楽しさに触れ、開放感の中で楽しむことができました。



八戸学院幼稚園

プロに負けない意気込み! ～東北フリーブレイズ来園～

プロアイスホッケーチーム「東北フリーブレイズ」の方々をお迎えして、輪になって体を動かすボックス体操や、じゃんけん列車ゲームで選手の皆さんと楽しく触れあった後は、フロアホッケーに挑戦しました。チームに分かれての対抗戦では、教えていただいたスティックの扱いに四苦八苦しながらも必死でボールを追ひ、相手がプロでもゴール目指して走り回り、「もっとやりたい!」と意欲満々でした。



八戸学院3幼稚園
マスコットキャラ

ステラが行く

vol.2



八戸学院幼稚園 幼保連携型認定こども園としてスタート!

本園は今年度より、幼保連携型認定こども園として開園し、就労や就職活動、介護など保育を必要とするご家族の子育て支援として、これまでの満3歳以上児に加え、1歳・2歳児を受け入れ、一人ひとりの発達の過程に即した保育・教育を、ご家庭と共に進めています。

笑顔がいっぱい!

《1歳・2歳&満3歳クラス》

入園当初お家の方と離れるのが寂しくて泣いていた子どもたちは、毎日登園し、感覚を刺激する教具で遊び、保育教諭の笑顔と温もりの中で、安心感と共に様々な活動を通して刺激を受け、意欲的に活動しています。園内散歩ではカメラやザリガニの動きに驚き、他クラス前で「バイバイ」と笑顔で手を振り合い、園庭では砂の感触を楽しむなど、活動の範囲を広げて関わりを楽しんでいます。「ママ 来た」「貸して」「ありがとう」など言葉で思いを表現できるようになってきたり、靴を履けるようになったり、作品を作ったりと、食事や排泄、健康などの生活習慣を身に付けると共に、「自



分ができる」ことがどんどん増え、「できた!」「やった!」と達成感や満足感十分に感じて、安定した園生活を過ごしています。

だいすき はちのへ!

《八戸を見隊!知り隊!感じ隊!》

《年少、年中、年長クラス》

昨年、学校法人光星学院創立60周年を記念して行われた記念ミュージカルのステージで、本園年長児が発表した三社大祭の取り組みから、地元「八戸」への興味が高まりました。そこで、今年度は、園外保育などで蕪嶋や種差海岸、三八城公園、是川縄文館、そして制作中の三社大祭山車小屋などを訪問しました。中でも、年長児は「南部昔コ」にあります「くじら岩」伝説を知り、実際に「くじら岩」を見に行きました。「くじらが復活したらどんなことをしたい?」と子どもたちの想像力を刺激し、絵画や粘土制作での表現活動を楽しみました。これらの体験は、7月に行われた星の



子祭でも作品展示しましたが、今後も星の子音楽会での表現発表などご披露する予定です。どうぞご観覧ください。



★おんでおんせ

■八戸学院3園合同星の子音楽会

《日時》11月7日(水) 9:50~12:00

《場所》八戸市公会堂にて(入場無料)

■イルミネーション点灯

《日時》11月30日(金) 16:00~16:20

《場所》本園にて

オーストラリア教育の移り変わり 世代間で大きな差

What is the impact of extreme educational approaches on spelling in Australian schools?

Synopsis はじめに

From spelling dux dad to spelling dunce daughter, extreme educational approaches in Australian schools can impact on the spelling capabilities of students in just one generation.

筆者の父親世代から筆者の世代そして現在に至るまで、世代間での教育法の違いによって正しい“スペリング”、つまり英語の正確な綴り能力に大きな差が生まれている。

Spelling Dux Dad スペリング優等生の父親

Traditionally, Australia has a proud history of producing super spellers. Over a 100 years ago, my grandmother's education consisted of the “3R's” an acronym for “Reading, Writing and Arithmetic.” Students parrot-learned the three core skills from the all-knowing teacher, in rote like fashion. Times tables, spelling, punctuation and grammar rules were sung out loud in unison. Although inkpots were exchanged for modern pens, compulsory education for my father's generation continued to mirror the “3R” approach, successfully churning out grammar kings, spelling queens and human calculators.

100年以上前のオーストラリアから筆者の祖母の時代には、“3R”と呼ばれる読み書きと計算を中心とした教育が行われていた。九九やスペリングそして文法の丸暗記や反復練習、クラス全員での音読は、筆者の父親世代になっても変わらなかった。この結果、常に文法やスペリング能力、計算能力に優れた子供たちが多く存在した。

Rules of literacy were taught explicitly, systematically and without compromise. Mistakes were unforgiven. When reading a text out loud in front of the class, a mispronounced word resulted in humiliation, the teacher publically shaming the student for making an error. Fellow classmates would snicker, jeer insults or remain deathly silent, praying they would not be the next victim. Teacher enforced punishment for misspelled words included rewriting the word 100 times during lunch. Although reserved for behaviour misdemeanours, the cane may have been a deterrent for incorrect spelling. The cane was a large, flexible stick made of bamboo. Students who found themselves in this unenviable predicament were required to hold out their hand, palm up and receive 1-5 whacks administered by the Headmaster. However, my father assures me his motivation to spell well was not driven by fear, but rather by the dream to be top of the class. A goal he achieved. In grade 7, my father was the proud recipient of the 1958 gold medal for being dux of the school. Thanks to his education by rote learning, rules and repetition he was, and still is, a spelling champion.

文法は、妥協なく明確にそして規則的に指導された。間違いは許されず、音読で読み誤りがあれば、クラス全員の前で教師の叱責によって恥ずかしい思いをさせられ、周囲の他の生徒の嘲笑や‘次は自分か’という恐怖の沈黙が続いた。また、スペリングのミスがあれば、昼休みに100回ずつ書き取りの練習をしなければならなかった。さらに、当時生徒の非行行動に対して行われた体罰（これは校長が竹の棒で1回から5回生徒の手のひらを打ち付けるもの）ですら、スペリングのミスの抑止になり得ることも決して大きではなかった。筆者の父親によれば、それらの恐怖よりも純粋にクラスで一番になりたいという思いが強かったようである。努力の結果、7年生のとき(1958)には優等生金メダルが授与された。彼が今現在に至るまで、スペリングチャンピオンであり続けられるのは、当時の教育法のお陰である。



筆者の父親が7年生の時に授与されたメダル

Spelling Dunces Daughter スペリング劣等生の娘

While my fathers' education produced spelling geniuses, the dominate pedagogy of rote learning was criticised in the late 1960's and 1970's. My generation partook in a significant shift in education. Schooled in the 1980's we were privy to a much gentler approach to learning. Corporal punishment was abolished and freedom emphasised. Authoritarian teaching practices became a ghost of the past. Instead of being taught strict grammar, punctuation and spelling regulations, 80's kids were left to experiment. Teachers encouraged us to simply guess spelling with no attempt to teach spelling conventions. This was known as “Inventive Spelling” . It was the age of student-interest based discovery learning. School days were filled with fun, story writing, week long art projects and drama productions. In the absence of rules, creativity reigned, particularly creative spelling.

スペリングの天才達を生み出した丸暗記法などの教育法は、1960年代後半から70年代にかけてその是非が問われ、私の世代である1980年代になると大きく変化した。生徒の独創性重視の教育法が実験的に導入され、権威主義的な教育法は過去のものとなった。授業は自由な風潮でもちろん体罰も無し。教師達は、厳しく文法やスペリングを指導する代わりに、生徒に“インベンティブ スペリング”つまり音を頼りに自由にスペリングを予測、発見する方法で言葉を綴るように強く促したのである。学校での学習は、これまでの文法無視の楽しい物語作りや、演劇、生徒の興味や独創性が主体となった。



小学校教室の掲示版より

In my children's generation, there has been a return to the “3R's” . The problem is the responsibility lies on teachers, the majority of whom have been educated as I have, in the “Inventive Spelling” era.

現在、私の子供世代における問題点は、“インベンティブ スペリング”に代表される教育を受けた私世代を中心とする教師達が大多数を占める中、“3R”と呼ばれる読み書き計算を中心とした教育への回帰が見られることである。



Jodie Hogan (八戸学院地域連携研究センター客員教授)

Jodie Hogan is an Associate Lecture with Hachinohe Gakuin University residing in Far North Queensland, Australia. An experienced primary and secondary teacher, having also taught interstate; South Australia, New South Wales and Queensland as well as overseas in Japan.

日本とオーストラリアで幼稚園から大学まで20年以上の教師経験。オーストラリア ケアンズ在住。

資格取得講座を含めた防災教育による
地域活性化の研究

八戸学院地域連携研究センター
准教授 BOSA I推進室長 井上 丹

大学生が地域社会とつながりを持つとしても、何から始めればよいかかわらないという課題があり、防災活動が一つのきっかけになればと考え、教育研究を開始しました。自分の身を守るだけでなく、エネルギーある学生は、災害時にたくさんの人を助けられる可能性を持っています。これを多くの学生に理解してもらい、防災の意識を持った学生が、地域の人たちとつながり活動していくことで、地域の活性化につながると考えています。

〈BOSA I推進室の設置〉

災害に対する基本的な知識と自らの身は自らで守るための技術を持った地域市民を育成するために、防災士資格取得養成講座を事業の中核として、付随した防災活動や救命講習の実施、各団体が実施する防災教育での講師派遣、公開講座などを実施し、地域社会の安全安心向上に寄与することを目的としてBOSA I推進室を今年度開設しました。

※「防災」を「BOSA I」と表記する背景は、災害が多い日本の防災教育が全世界で活用されて防災が世界共通言語となってほしいという狙いと、本

学がグローバル化を進めており海外の災害対策から学び海外での災害支援も目指す意味を込めています。また、教員や看護師、保育士等を養成する本学の全学的普及を目指します。

〈防災士養成講座について〉

防災士とは、自助（自分の命は自分で守る）、共助（地域・職場で助け合い、被害拡大を防ぐ）、協働（市民、企業、自治体、防災機関等が協力して活動する）を原則として、社会の様々な場で防災力を高める活動が期待され、そのための十分な知識・技能

を習得したことを、日本防災士機構が認証した人です。

今年度は5月と9月に防災士養成講座を開講しました。八戸市内や青森県内で防災にかかわる著名な方を講師としてお招きし、学生や本学教職員、一般市民合計96名の方が2日間に及ぶ講義を受講。次回は2月23日、24日に実施予定（検討中）。



准教授 井上 丹



八戸市土砂災害ハザードマップより

ハザードマップで確認を

近年の自然災害で特に増えているのが土砂災害です。台風等による大雨によって身近な山地が崩れ落ち甚大な被害につながる恐れがあります。まずは自分が住んでいる場所が安全かどうかを確認しましょう。八戸市は土砂災害ハザードマップをホームページで公開しています。土砂災害警戒区域と特別警戒区域が近くにある場合は、豪雨時に早めに避難することを意識してください。

八戸市HP (八戸市土砂災害ハザードマップ)
<http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/26,24012,81,288.html>

アナスタシス文庫に頂戴した寄付金で、
“国境なき医師団”に3回目の寄付をいたしました。
ご協力頂き誠にありがとうございました。



国境なき医師団 (Médecins Sans Frontières=MSF) は、
独立・中立・公平な立場で医療・人道援助活動を行う
民間・非営利の国際団体です。

【アナスタシス文庫】より
【国境なき医師団へ】へ寄付

【アナスタシス文庫】により集まったお金を「国境なき医師団」に寄付し感謝状をいただきました。「アナスタシス文庫」とは、当館で廃棄処分となった本を古本市として設置しているコーナーで、本には値段を付けていません。当館を訪れる利用者が欲しいと思う本に自由に値段を決め、設置してある代金箱にお金を入れる仕組みになっています。集まったお金は団体へ寄付されていて、今まで本学の教職員や学生そして一般の方々からたくさんのご厚意をいただきました。

この古本コーナーの名前になっている「アナスタシス」という言葉は聞き慣れないので、どういう意味なのかと尋ねられることがあります。これはギリシャ語で「復活」という意味を表していて、廃棄となった本が再び人の手に渡り読んでもらえることから、本が「復活」という思いを込めて【アナスタシス文庫】と名付けました。廃棄処分となる本とは、当館が複本として数冊購入した本の内容が古くて時代に合わなくなったたり、寄贈をして頂いた本の中でも既に当館で所蔵してあり重複してしまった本などです。それらは教

育・金融・経済などの専門書のほか、小説なども含まれており、中には掘り出し物と言われる資料があり「本当にもらってよいのか？」と驚かれることもありました。今でも専門書を中心に「新書」や「文庫」なども並べられています。

このコーナーを2013年に設置して5年が経ち、多くの方々の協力を得て、「国境なき医師団」に今までに3回ほど寄付させていただきました。【国境なき医師団】は、紛争や自然災害や貧困などで苦しむ主にアフリカ・アジア・南米などの途上国で活動しており、昨今もインドネシアでの地震津波災害やロヒンギャ難民キャンプで医療や人道援助活動を行っています。これらには、さまざまな理由で緊急性の高い医療ニーズが求められていて、ほぼすべて民間からの寄付で成り立っているとのことですが、まだまだ支援が不足していると言われています。

当館から寄付した金額はわずかですが、廃棄となった本が「復活」することにより、本の力が少しでも役立つように今後も微力ながら支援できるように継続していきたいと思えます。



法官新一
Shinichi Hogan

はかなり困難な気もしたが、後日進言に従い事務職員対象で実施することを決めた。本学院は家族的な職場の環境にあり、互いのコミュニケーションや業務遂行に関しての協議・連携・協力も旺盛と感じている。また日々の上司への進言や報告・連絡・相談という基本的な事柄については、今までの研修の場を通して研鑽を積み個々の能力の向上は図られていると思っている。

働き方改革...



とした改まった場における積極的かつ活発な場面は少なかった。面談の実施はこれらの不足を補うのに十分であり、高校運営にとって大きなエネルギー充填になった経験がある。今回の進言から、時間の隙間を見つながら事務職員全員と面談を行うことが出来た。職員のほとんどは勤務した頃から、何かしらいろんな機会に話すことがあって、その人柄や仕事に対する姿勢や思

いは認知しているつもりであった。またそれぞれの背景にある様々な状況についても把握し、理解し多くの課題も十分認識しているつもりであった。いわゆる分かっているという思いだった。一人15分程度という計画で実施したが、中身の濃い面談となった。学院に対する思いも伝わってきた。働く環境の現状や課題

が如実に伝わってきて、運営の在り方まで見直しを迫るような話も聞くことができた。また、同僚や組織という狭間の中における難しさや課題も浮き彫りになり、早急な対応も感じる件もあった。事務を取り巻く運営上の問題点については、今回のヒアリングを大事にし、スピード感を持って改善に努めることを感じたとともに、結果を皆さんに見えるようにしなければと思う。

面談から印象深かったことを抜粋してみた。多くは、職場を受け入れ本学院の今後に尽力したいという、前向きな努力志向の意見が多かった。仕事量や日常の業務に対しては、一部部署において時間的な加重や負担はあったが、工夫とアイデアによって前向きに取り組んでいることを知った。部署替えの要望は少ないものの、待遇改善を望む意見もあった。他に、学生、生徒、園児ファースト・保護者と地域の連携強化・職員間の緊密連携強化・教員との関係強化・意見の言える職場・ITの改善。今後の方策としては少子化の中における募集の在り方の重要性・自己目標の設定と自己実現・やりがいのある職場創生とやる気のある職場・組織の中で自己発揚などそれぞれが感じていることに耳を傾けることが出来たことは、今後の法人運営に活かされていくようにしたい。

地

域連携研究センターに席を置く井上准教授から、「働き方改革が言われる時代にあつて、本学院はどういう現状にあるのでしょうか」という問いかけがあつた。毎日がそれなりに流れ、各部署においてもそれなりに大過なく業務が行われているという思いがあり、学校法人が置かれた現状から多くの課題を抱えながらも教職員によってそれぞれの責任は果たされているものと考えていた。

井上氏の問いに的確な回答が出来ないでいるところに、「教職員と個人面談を実施しませんか」という進言があつた。即座に返事はしなかったが、実施の価値判断は出来た。中規模の法人とはいえ、全職員対象

秋

晴れの日、郷土自慢の種差まで歩くことにした。我が家から大凡5キロ。2時間も歩くと悠々目的地に着くと踏んだ。予定の1時間で白浜海岸の端っこに着いた。ここから先は種差海岸まで岩場が続く遊歩道だ。何十年も前に歩いただけで、整備されてからは初めての道になる。

この白浜漁港の上が休み場所だったが、丘に登る前の浜小屋の簾にとろ天とか飲み物の張り紙を見つけ、休憩の場所にした。

炭火で鮮魚を焼くおじさんと若い先客がいたが、小屋に近づくくと若者が席を譲ってくれた。お客さんでお客さんでないようなそぶりが気になったが、取り敢えずビールを注文した。そうしたら、立派な平蟹と見たこともないようなでかいムール貝が出てきた。特にこんなムール貝は、海になじんできた私でも出会ったことがない。聞くとも目の前の海でとれたという。平蟹も後で出てきたでかいツブも目の前の海のものという。小一時間この店主のおばさんと調理の苦労や世間話で盛り上がった。料金は二人分で2200円。良い休憩と昼食を済ませ松原の中を歩き種差に向かった。

幼い頃に歩いた道はすっかり整備され、県外の観光客とすれ違う。道ばたのハマ菊は満開。赤紫のハマナスはなごり咲きで、



赤い実は鮮やかで独特の色である。白浜の波、青い海、海岸の松林に、波に洗われる岩。そして歩道足下の花。やがて開ける芝生の海岸。久々の自慢できる郷土散策の日だった。

北

東北リーグで本学の野球部が頑張っている。応援に行こうと思いついて八戸自動車道を南下し釜石道に入った。遠野は一度来ただけで車のナビが頼りだ。ところがそのナビで球場が見つからない。遠野町を彷徨しているうちに、沿道にずらりと車が停車され、ひとかたまりの人たちが、脚立に乗って一方向にカメラを向けていた。聞くともまもなく緑多い茂った林から、SLが来るといふのだ。その瞬間を待ち構えているカメラマンたちだったのだ。今かという列に紛れ込んでみた。やがてやってきた銀河鉄道SL列車は黒煙を上げ力強く、迫力満点だった。

ところで、当てにならないナビを諦め土地の人たちの誘導でやっと球場に。1時間遅れでスタンドに。戦況は不利。見方のスタンドはガラガラだったが、9回逆転で勝利。三連休の初日、遠野物語は良い一日であった。



遠野にて 黒い煙を上げてやってきたSL



短大部の栗の木を整備する学生たち
3年前に移植された短大部の栗の木は、学生たちの世話で今年もたくさんの実をつけた

HACHINOHE GAKUIN CAMPUS SPOT

カリタスラウンジ / アーカスラウンジ



ラテン語で「慈愛」を表す Caritas (カリタス)
愛・希望を持って未来へ進んで欲しいという願いが込められています。



「弓」を意味するラテン語 Arcus (アーカス)
心身ともに鍛錬し、天空に放たれる矢のように夢に向かってまっすぐ進んで欲しいという願いが込められています。



八戸学院光星高等学校には、多目的に使用できるスペースがいくつもあります。職員室をはさむようにあるのがカリタスラウンジとアーカスラウンジです。お昼は、お弁当を食べる生徒で賑わい、放課後は参考書片手に勉強をする生徒の姿が。隣の職員室から様子を見ていた先生が現れ、即席の授業が始まることも：この日は週末に開催される光星祭の準備で使用されていました。生徒と先生との貴重なコミュニケーションの場として親しまれています。

八戸学院光星高等学校

